

## ティリッヒと宗教社会主義

京都大学  
芦名定道

### < 内容 >

- 1 はじめに
- 2 ティリッヒの宗教社会主義論とその背景
- 3 宗教と民族
- 4 展望

### < ポイントと文献 >

- 1 . ティリッヒ ( Paul Tillich: 1886-1965 )  
ドイツ時代：初期 ( -1919 ) 前期 ( 1919-1933 )  
アメリカ時代：中期(1933-1945)、後期(1945-1963)、晩年期(1963-)
- 2 . 第一次世界大戦の敗北と革命 戦後ドイツ社会の再建とキリスト教  
宗教社会主義 ( カイロス・サークル、ベルリン・サークル ): 教会と教養市民層と労働者階層との統合による平等と正義に適った社会
- 3 . 初期の宗教社会主義論： Der Sozialismus als Kirchenfrage(1919)、 Christentum und Sozialismus I(1919)、 Christentum und Sozialismus II(1920)、 Grundlinie des Religiösen Sozialismus(1923)  
1920年代後半以降の宗教社会主義論： Die sozialistische Entscheidung (1933)  
Paul Tillich. Main Works · Hauptwerke 3. Writings in Social Philosophy and Ethics, de Gruyter, 1998.
- 4 . 「無神論はむしろブルジョワ文化の遺産であり、扇動的目的のゆえに、社会民主主義に好んで押しつけられたのである」。また、キリスト教をルター主義と同一視する人には、革命権はキリスト教的でないと思われるかもしれないが(二王国論) キリスト教には、革命権を認め、また革命義務を要請する伝統も存在する。
- 5 . グスタフ・ランダウア ( Gustav Landauer, 1890-1919 ) :  
連邦主義的アナーキズム ( federalistische Anarchismus )  
Paul Tillich. Berliner Vorlesungen I(1919-1920) / II(1920-1924) (Erganzungs- und Nachlasbande zu den GW. XII / XIII), de Gruyter, 2001/2003.
- 6 . 『社会主義的決断』：人間存在の分析 ( In-der-Welt-Sein ) から政治思想へ  
人間存在の二重性(被投性 / 企投性) Woher / Wozu 起源(Ursprung) / 要請 (Forderung) 「政治的保守主義、ロマン主義思想」 / 「自由主義・民主主義・社会主義」  
Paul Tillich. Vorlesung über Hegel (Frankfurt 1931/32) (ENGW. VIII. 1995).
- 7 . 起源の二重性：「真の起源と現実態の起源」、「現実態としての起源は真の起源の一つの表現ではあるが、歪められた表現なのである」。
- 8 . 宗教・キリスト教と民族主義の二重の関係：実体原理 ( 具体化の原理 ) と批判原理  
古代イスラエルの預言者の政治思想

## <要旨>

ティリッヒが宗教社会主義への関与を明確にしたのは、第一次世界大戦の敗北と革命の嵐が吹き荒れるドイツの状況下においてであった。ティリッヒが取り組んだのは、戦後ドイツの社会体制の選択とそれに対するキリスト教の関与という問題であり、彼は、ドイツの精神的統合にはキリスト教と社会主義の結びつきが不可欠であると考えた。もちろん、そのためには乗り越えるべき多くの課題が存在した。最大の問題は、個人主義的に解釈され資本主義体制に適合したキリスト教と、無神論と解釈された社会主義との対立である。初期の宗教社会主義論から、この対立に関するティリッヒの主張のポイントを取り出してみよう。キリスト教的な愛の倫理は本来個人の内面の問題に限定することはできない。むしろ、経済的政治的なエゴイズムや階級的な社会の分断や民族主義によって引き起こされる不正義を告発し、平等で正義に適った社会秩序の実現を目指すという点で、キリスト教は社会主義の理念と合致できる。社会主義が無神論であるというのは正しくない。マルクス主義的社会主義は唯物論的と言われるが、正確には経済学的と言うべきであって、共産主義それ自体が精神性の否定を含意しているわけではない。初期の宗教社会主義に影響を及ぼしたのは、ソビエト共産党の教条主義的マルクス主義ではなく、むしろ、グスタフ・ランダウアのアナーキズム的社会主義であった(19年の夏学期のベルリン講義「キリスト教と現代の社会問題」)。その後ティリッヒはベルリンを離れ、29年にフランクフルト大学に着任するが、この間、宗教社会主義についても新しい思想展開を確認することができる。この新しい展開で注目すべき点の一つは、政治理論を展開するための方法論が明確化されたことである。つまり、『社会主義的決断』(33年)で、ハイデgger(『存在と時間』)を参照しつつ、ティリッヒは人間存在における「二重性」を次のように説明する。人間は、自己を世界の中に既に置かれているものとして見いだす(被投性)とともに、未来において成就すべき自己のあり方を要請として意識する(企投性)。この二重性こそが問われるべき政治思想の根底にあるものなのである。人間の被投性は、人間の中に「どこから」という起源の問いを生み出し、この起源の問いに答えるものとしては、古代から様々な起源神話が物語られてきた。「この起源神話に向かう意識こそが、あらゆる政治的保守主義、ロマン主義思想の根である」。しかし同時に、人間は未来に向けて新しいあり方を決断的に選び取る存在者であり、そこに「どこへ」の問い、つまり実現すべきものへの要請・責任性の意識が生れる。これが、「政治思想における自由主義・民主主義・社会主義の根」であり、それは起源の神聖化・絶対化への批判として機能する。問題は、「真の起源と現実態の起源」という重層性にある。現実の民族主義(現実態としての民族的起源の意識)は歪み・逸脱の危うさを内に秘めている点で、要請の意識に基づく批判が必要になるが、しかし現実の民族意識は真の起源の一つの歪みを帯びた表現に過ぎず、要請(自民族中心主義を超える正義の要請)の意識に基づく批判とは、むしろこの「真の起源の完成」に寄与するものなのである。人間の共同存在が「自然的なもの」を基盤として成立するという点で、民族的な起源は不可欠である。その意味で、キリスト教には民族の積極的な意義を肯定することが要求される。しかし他方、キリストは、正義の要請に適った真の起源を成就するために、現実の民族主義の逸脱を批判しなければならない。民族的基盤を失ったキリストは、抽象的な観念の世界に逃避することによって、その現実性を喪失する。しかし民族主義の逸脱を批判し得ないキリストは、その存在意味を失う。キリスト教と社会主義の媒介によって、宗教社会主義はこれら二つの危険の回避を目指したのである。